

2023年3月12日 礼拝説教要旨

詩編講解説教140「解放の詩」

詩編140：2～8、ルカ4：16～21

「主よ、さいなむ者からわたしを助け出し、不法の者から救い出してください」（2節）詩人は「さいなむ者」「不法の者」によって苦しめられています。「さいなむ者」とは誰でしょうか。具体的に自分を苦しめる特定の人を思い浮かべるかもしれません。あるいは不法のはびこる世の中に対して、様々な悪事を謀る者たちを考えるかもしれません。実際に世の中には暴力的、好戦的な人々がいます。戦争があります。強盗や詐欺を働く集団があります。確かにそういうものから救ってください、逃れさせてくださいとわたしたちは祈るかもしれませんが、しかしもっと根本的にわたしたちを苦しめる存在があります。

主の祈りの第六の祈りは「こころみにあわせず、悪より救い出したまえ」です。マタイが伝える主の祈りでは、この「悪」は「悪い者」となっています。つまりそれは人格化され、意志を持ってわたしたちを試み、誘惑する存在として捉えられています。それはサタン、悪魔です。積極的にわたしたちを誘惑し神さまから引き離そうとする力が働いています。この140編では「蛇」が出てきます。「舌を蛇のように鋭くし、蝮の毒を唇に含んでいます」（4節）すぐに創世記のアダムとエバの話を思い浮かべることができるでしょう。創世記では、蛇は「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いもの」（3：1）と言われます。まさしく悪魔は巧妙です。「舌を蛇のように鋭くし」（4節）とありますが、これは言葉による攻撃です。ある注解書では蛇の舌は二股に分かれていて、それがいわゆる「二枚舌」を意味しているとありました。巧みな言葉、心地よい言葉、美しい言葉、そういうものにわたしたちは弱いのです。そして他でもない自分自身がそのように言葉を操り、誰かを陥れるのです。そのようにして自分自身がサタンの道具になります。こういった言葉の問題を考えると、ヤコブの手紙を思い起こします。「舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています。わたしたちは舌で、父である主を賛美し、また、舌で、神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです」（ヤコブ3：8～10）そのように言葉は神さまを讃える言葉にも人を呪う言葉にもなる。それこそ「二枚舌」です。それは言葉を用いる人間に問題があります。人間が罪に支配されている。だから言葉を間違える。そしてこの世界は偽りに満ち、疑心暗鬼が支配して、誰も信じられなくなります。

詩人はそういう状況の中から「助け出してください」と祈ります。「助け出す」というのはある場所から助け出すという意味です。英語の聖書では「deliver me」となっています。それは「解放してください」「運び出してください」ということでしょう。ここで改めて気づかされることは、罪とは自分があるべき場所にいないということです。どこか別の場所に捕らわれている。そこから解放される、救い出される必要があります。わたしたちが慣れ親しんでおります『ハイデルベルク信仰問答』では、罪について教えるときに人間の罪とは教えず、「人間の悲惨」と教えます。罪というのは確かに惨めな状態をもたらすのですが、その惨めさの意味は「締め出される、追放される」ということだと学んだことがあります。どこかあるべき場所から締め出されること。罪と言いますと、どうしても倫理的な問題、道徳的な問題と捉えられがちですが、問題は本来のあるべき場所にいない。それは神さまとの関係において神さまのもとにいないことと理解してよいのです。

神の民イスラエルはそのような経験を嫌というほどしてきました。出エジプトに始まり、バビロニア捕囚もそうです。彼らはいつも本来のあるべき場所にいませんでした。だから約束の地を目指して旅をしなければならなかった。だからエルサレムに帰らなければならなかったのです。そもそも人間は神さまのもとを離れました。約束を破り、樂園を追放されました。あるべき場所にいない。そこにあらゆる人間の悲惨の源が生まれます。言葉も、人間があるべき場所にいないことによって、それは賛美ではなく呪いになってしまうのです。誰かを陥れる罠になり、誰かを殺める毒になるのです。

けれども神さまはわたしたちをそこから解き放ち、あるべき場所、神さまのもとへと連れ戻してくださいます。神の国、神さまのご支配へと導き入れてくださる。それがイエス・キリストの救いです。そのために主イエスご自身があるべき場所を離れて、不法に満ちたこの世界に来てくださいました。そしてあらゆる悲惨を経験されました。主の御受難を思い起こしますが、ご自身が嘲られ、言葉の暴力を受け、その罠に、落とし穴に自らその身を置かれたのです。そして最後は主イエスを陥れようとする律法学者やファリサイ派の偽証によって真実が押し曲げられ、十字架の死へと追いやられてしまいました。それはそのような不法を働き、心に悪事を謀る罪の支配からわたしたちを救い出してくださいるためです。そしてあるべき場所へ、神さまの御国に迎え入れてくださる。そこにわたしたちの救いがあります。

そしてこの救いによって、わたしたちがあるべき場所に収まるときに、わたしたちの言葉も真実なものとして整えられていくでしょう。『ハイデルベルク信仰問答』は十戒の第九戒のところのように告白します。「わたしが誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉も曲げず、陰口や中傷する者にならず、誰かを調べもせず、軽率に断罪するようなことに手を貸さないこと。かえって、あらゆる嘘やごまかしを悪魔の業そのものとして、神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ、裁判やその他のあらゆる取引においては真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の荣誉と威信とをわたしの力の限り守り促進する、ということです」わたしたちが本来のあるべき場所、神さまの御前に回復されたとき、わたしたちの言葉もそのように回復されると信じます。